

## 故村上肥出夫さん 作風変遷

岐阜市2会場 回顧展始まる



厚塗りのマチエールが特徴的な村上肥出夫さんの油彩を並べた回顧展＝岐阜市神田町、G's Dream

厚塗りのマチエール（絵肌）が特徴的な土岐市生まれの画家、故村上肥出夫さん（1933～2018年）の回顧展「花が欲しい、光が欲しい 村上肥出夫展」が5日、岐阜信用金庫の施設「G's Dream」（岐阜市神田町）と長良川画廊（同市泉町）で始まった。抑制された色合いの初期か

ら極彩色を用いるようになる1970年代以降まで、作風の変遷をたどることができる。15日まで。村上さんは養老郡養老町で育ち、20歳で画家を志して上京。仕事を転々としながら路上で暮らすなどして絵を描き続け、63年に画壇デビューすると「放浪の画家」として一躍人気を博し

た。下呂市萩原町にアトリエを移したが、療養に入ってから絵筆を握らず、84歳で亡くなった。

展覧会は同画廊と、村上さんと生前交流があった岐阜新聞社最高顧問の杉山幹夫さん（98）が主催。岐阜新聞社、岐阜放送など後援。2会場に油彩を中心に計約50点を並べた。

同施設の会場では抑えた色調で東京を描いた62、63年ごろの作品を多く展示。「黄色い空」は鈍い黄色が画面いっぱいになり、激しい筆致で塗り重ねられている。同

画廊の岡田晋代表（64）は「色は暗いが、将来への希望を塗り込めたような明るさがある」と話す。

パリの一角が鮮やかに描かれた所有作品を展覧した杉山さんは、村上さんがパリへ行く際、絵の具を好きなだけ買って持たせたことを振り返り、「少年がそのまま大人になったような純粹さがあった。彼ほど絵の道一筋の人はいない」と人柄を語った。

展覧会は東京・六本木でも30日～7月15日に開く。（大賀由貴子）